

文学に現れた土佐の風土と人間

— 古代 編 —

竹 村 義 一

一、はじめに

和辻哲郎著「風土」が世に出たのは昭和十年のことである。当時まだ若かった筆者も、この書のお読者の一人となった。そして日本人を理解するのに、このような方法が有益であることを知った。やがて日本文学研究者の間にも、日本文学と風土との問題が関心をよび、一つの研究分野として取り上げられるようになった。現在も文学と風土の問題が研究者たちによって追究せられている。筆者も一つの試みをしたと思う。しかし文学と風土との関係は、極めて複雑である。人間は空間的存在であると同時に時間的存在である。そして同時に社会的存在である。風土は人間に作用し、人間が文学を作る。そして作者は人間と風土を描く。しかも人間は風土の中に、

そして社会の中に、和辻の言葉で言えば「人と人との間」に生きてゐる。そのような風土と人間との間を探るために、筆者は、まず一次的作業として、文学に現れた風土の相を探ってみようと思う。もちろんそれは作者という人間によって直観され、認識され、把握され、形象化されたものである。作者という人間の目を通して見られた風土である。彼は、その彼によって描かれたものの中に自己を投影する。そのような契機によって、作者は自画像を描くとともに、彼以外の人間関係を、その風土の中で描く。そのように描かれた人間の相を探究してみたい。

そしてその風土の範囲を、このたびは日本の中の、最も小さな単位といふべき一つの県に限ることとした。東北とか南海道とか、気候・風土のより大きい単位も考えられるが、一般的に「県民性」として概括される地域をとることとした。筆者の生まれ育った高知県

は、律令制以来の国郡制の國、土佐の國と区画が一致し、かつ徳川幕藩制度時代の一藩（山内氏）の区画とも一致する。そして北は四国山脈によって、他の三國と隔絶し、南と東西は荒海で画されている。風土と人間を採るには、かっこうのモデル・ケースと言い得よう。なお標題は「文学に現れた土佐の風土と人間」としたが、この「文学」という語を広く解して、とくに資料の少ない古代においては、歴史的文献とも言うべき資料を多く採用した。

二、土佐の國

1 建依別

「土佐」という國名が文献に現れる最も古いものは、「古事記」の國生みの段である。「土左國は建依別と謂ふ」とあり、建依別は健々しい人の意と解されている。四國の他の三國は伊予を愛比売、讃岐を飯依比古、粟向を大宜郡比売というに對して、男性的で勇猛な響きがある。宣長は「古事記伝」で「建依別は何となき称名と聞ゆ、神名帳に安芸郡に多氣神社あり、さて此記を始めて古書どもに多氣といふに建字を用ゐるは、健字の偏を省けるなり」と述べている（岩波・本居真氏全集九卷一八八頁）。この社は土佐日記の奈半の泊り、現在の奈半利にある神社で、式内社であつて祭神は武内宿禰だとされている。

中山巖水編著の「土佐國編年紀事略」（弘化四年成立）は卷一の冒頭に、古事記の國生みの四國の条を引き、次の如く述べている。

按ニ土佐國ヲ建依別ト号シコトハ阿波國ヲ大宜月比売トイヒ讃岐ノ國ヲ飯依比古ト号シ例ト同シケレハコト指ス所アルニ似タリカノ飯依比古ハ讃岐ノ飯ノ山ニテ世ニ讃岐富士ト云ヘル山ナルヘク又大宜津比売ト云ハ阿波ノ鳴門ノ中ナル島ヲ大宜ノ黒島ト云ヘハソコナルヘキ上マタ比売ト云ヘキサマモシタリ依テ思フニ安芸ノ郡室戸崎ヤコノ建依別ノ地ナルヘキカ此崎ヒトリ遠ク南海ニ走り出テ、比古トモ申スヘク又三ノ浦ノカタヘニタケガハナト云ル山モアリ奈半利ニ多氣ノ神社ナトアルモカタ／＼由アリケナレハ也ヨム者更ニ考ヘシ

室戸崎が鋭い三角形をなして太平洋に突出している形状を男性的であつて、建依別の名はこの地から起つたのかと推論している。それは室戸崎に限つたわけではない。土佐の地勢は、北には岬々たる四国山脈が、東は剣から西は石鎚へと峻険の峰々が馬のたてがみの如く連なり、南は、東に室戸、西に足摺の両岬が長く突き出し、えんえん三百キロの海岸の大部分は山脈が迫り、太平洋の荒波が岸をかむ。その姿は鴻が翼を広げて南方にかけらんとするさまと言われている。建依別の呼び名は、まことにふさわしいといふべきであらう。

2 土佐の文字

まず土佐の文字についてみるに、筆者の当たったところでは、「古事記」「日本書紀」(共に岩波日本古典文学大系本)には、「土左」と「左」の字を書いてあり、「続日本紀」(国史大系本)も「左」である。「延喜式」(国史大系本)には「左」と「佐」が混在し、さらに「日本後紀」「類聚三代格」(共に国史大系本)などには、おもに「左」の字が用いられているのに対して、「和名類聚抄」(風間書房 正宗敦夫校訂本)などには「佐」の字が用いられている。「高知県史要」(中城直正他編、大正13、高知県発行)に次の如くある。

元明天皇の和銅六年五月、令して畿内七道の諸国郡郷の名に好字を著けしめしより、土左の左を佐に改められしか、又除目の大間には必ず左の字を用ゐるといふ。依りて考ふるに古へは左の字を用ゐたりしが何時しか互用となり、終に佐の字に一定せしもの、如し。(右同書二頁)

おおむね穩当な見解というべきであらう。

3 土佐の語源

次に土佐トトサという国名の起源や語義について考えてみたい。安養寺末磨の「土佐幽考」(享保一九)の「冒頭国名の条に次の如くある。

土佐者俊聡也当国人心俊速聡明之称也或云土者速也佐者狭也国形

東西遠南北狭故遠狭之意也

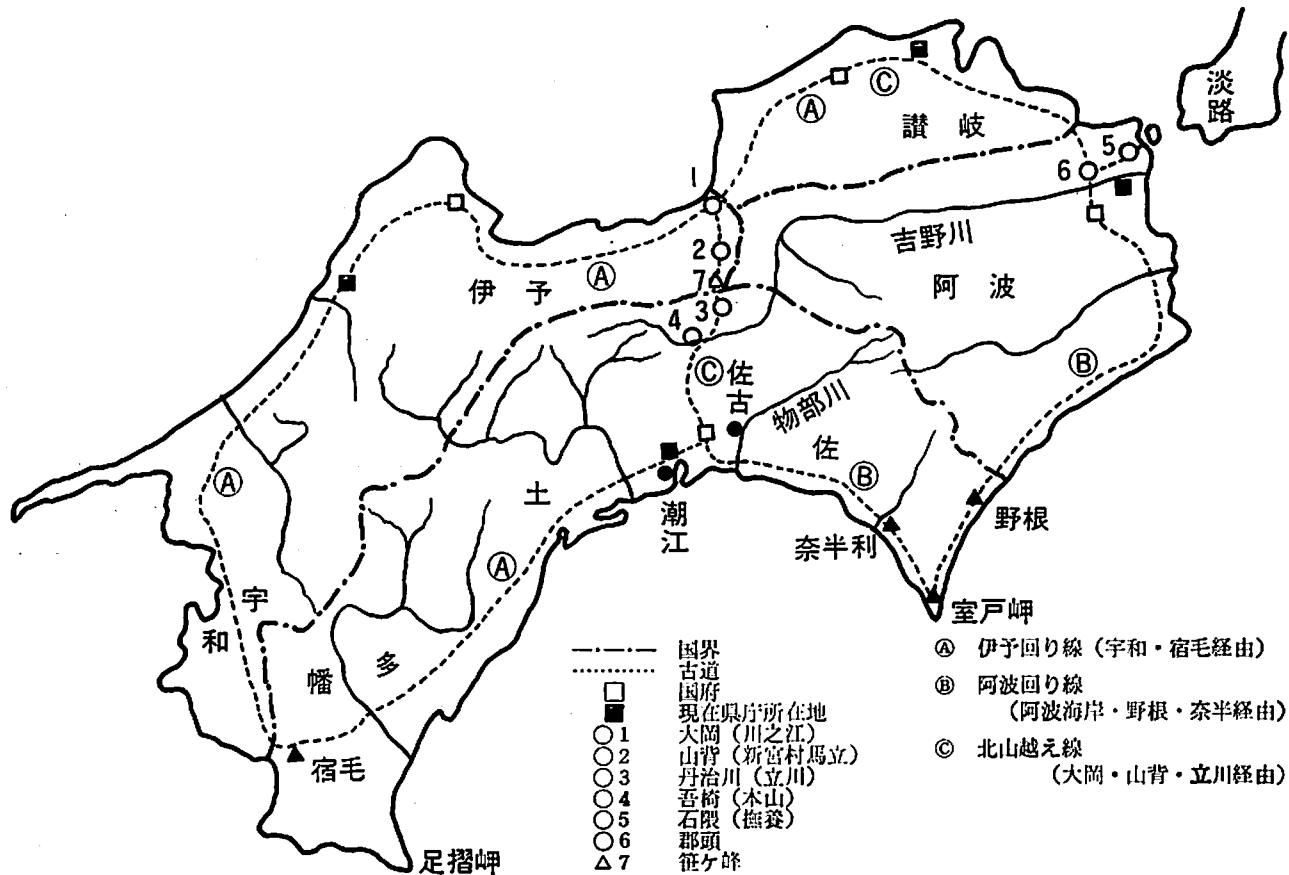
上古作土左自元光元
天皇御宇ニ文作土佐

土佐人の性格あるいは、土佐国の地形からだとしている。土佐人の

性格から国名が出てくるという論理はうなずけない。またト(土)を遠いと解するのは無理だと考えられるし、未開の時代に土佐国のような広大な地域に対して、遠く狭いというような概括をすることが可能であったか、疑問である。このほか多くの説があるが、いずれも首肯することのできるものはない。ただその中で比較的無難なものは、次のような説である。「土佐国の中央部、浦戸湾の入口(浦戸と種崎の間の海峡)ここをワラド△浦戸あるいは浦門▽という)が狭いので門狭といひ、浦戸湾周辺で人家のあつた湾の奥の現在の一宮(土佐高鴨大社の鎮座する辺)のあたりをトサと呼ぶようになった。「和名抄」の土佐郡の中の土佐郷がそれである。そしてその郷名から郡名とも、国名ともなった。」というのである。もちろん地名の語源は確なことはなかなか分からない。この説も「和名抄」の郷名が土佐だという点に一つの接点を持つことが、他の説に比してつかまえるところがあるという程度である。吉田東伍の「大日本地名辞書」は、ただこの説を一つだけあげて、何の根拠も示さずに「疑はし」と言っている。

4 地震と台風

土佐の国が歴史の上に、事件として現れるのは、いわゆる白鳳の地震と称せられる西暦六八四年の南海道沖地震の時である。「日本



「書紀」卷廿九に次の如くある。(岩波・日本古典文学大系本下巻 四六五頁)

天武天皇十三年甲申冬十月己卯壬辰^{十四}(西曆六八四)

遽^レ于^レ人定^レ大地震。举^レ同男女叫唱不知東西。則山崩河涌。諸国郡官舍、及百姓、介屋、寺塔神社、破壊之類、不可^レ勝数。由^レ是人民及六畜、多死傷之。時伊予湧泉、没而不^レ出。土佐、国田、苑、五十余、万頃、没^レ為^レ海。古老曰、若^レ是地動、未^レ嘗有^レ也。是夕、有^レ鳴声、如^レ鼓、聞^レ于^レ東方。有^レ人曰、伊豆嶋西北二面、自然増益、三百余丈。更^レ為^レ一嶋。則如^レ鼓音者、神造^レ是嶋^レ響也。

(傍点筆者以下同じ)

天武天皇十三年甲申十一月戊申庚戌

土佐、国司言、大潮高騰、海水飄蕩。由^レ是、運^レ調船多放失焉。

右の地震は南海道沖地震の記録に残っている最古のもので沢村武雄理博(高知大学名譽教授)によれば、マグニチュード八・四で、震域は、土佐・東海・南海・西海諸道に及ぶという。右の書紀の文中の、この地震で地盤が沈降して海に没した田畑の面積の五十万頃は、一千町歩(約一千^{ヘクタール})にあたる。十一月の大潮高騰云々は、津波によるものと考えられる。右の文でいかに地震が激しく被害が大きかったかが想像される。土佐は南海道沖地震の直撃を受ける位置にあり、記録に残っているものだけでも、右の白鳳以来、千三百年の間に八回、マグニチュード八程度の大地震にあっている。一六〇五年

の慶長以後は宝永・安政・昭和と約百年に一回の割となっている。現在、高知県といえは昭和九年の室戸台風如く、西南方から襲来する台風の直撃を受ける風と雨の災害県として一般に認識されているが、地震においても決して他の地方にひけをとらない。日本の歴史に土佐が現れる最初が地震の災害であったということは、土佐の風土の特徴をよく示しているといわれよう。

古代の史料に、台風関係では、次の記事が見受けられる。

宝龜九年三月己酉^三(七七八)

(上略)土左国言。去年七月。風雨大切。四郡百姓。産業損傷。加以。人畜流亡。廬舍破壊。詔加^三賑給^一焉。(続日本紀卷三十五：光仁天皇)(国史大系本 後篇 四四一頁)

暴風雨による産業・人畜・家屋の被害の甚大なさまを簡潔な表現の中によく物語っている。そして四郡の人民に救援物資を支給したという。まことに現在の台風情報を聞く思いがして、高知県では、昭和四十五年八月の台風10号、五十年八月の5号、五十一年九月の17号が想起される。

なお、その四年前に次の記事がある。(同右、卷三十三 四一七頁)宝龜五年秋七月辛丑^四。若狭。土左・二国飢。賑^三給^一之。

右の飢饉の原因はわからないが、おそらく暴風雨に関係があるのではなからうか。土佐の国の位置と地形は本州を襲う台風の防壁となつて、昔も今も変らぬ、きびしい試煉を受けている。

三、四国山脈の峻険

次に歴史に現れる主要なことからしては、都から土佐に至る官道の変更がある。

なお都から土佐への官道は、次のように考えられてる。大和に都のある時代は、大和の五条市から、紀伊の橋本市に出て、紀ノ川を下り、和歌山市加太から紀淡海峡を渡り、淡路を経て鳴門海峡を渡り、阿波に至り、讃岐・伊予を経て土佐の国府に達した。都が山城に移ると摂津・和泉を経て紀伊に入り、加太港からは前と同じ道筋であった。阿波の最初の駅は石隈（鳴門市撫養付近に比定される）であり、次の国府・郡頭までは變動はないと考えられるが、それ以後が次のような変遷を経るのである。

養老二年五月庚子。(七一八)

土左国言。公私使直指_ニ土左_ニ。其道_経伊与国_ニ。行程_{迂遠}。山谷_{険難}。但阿波国。境土相接。往還甚易。請就_ニ此国_ニ。以為_ニ通路_ニ。許_レ之。(続日本紀卷八 七四頁)

都から遙かに遠く、かつ山道が険峻困難である状を述べている。ここで官道の変遷を史料から抜き出していくと、次の三つの記事がある。

延暦十五年二月丁亥。^{廿五}(七九六)

勅。南海道_路過遠。使令_懸通。因廢_ニ旧路_ニ通_ニ新道_ニ。(日本紀略前編十三……桓武天皇) (國史大系本 二六九頁)

前に阿波經由に変更したけれども、なお土佐への道は、遙かに遠く、都からの使は通行に難儀をしたので、旧道を廃し新道を開いた。

延暦十六年正月甲寅。^{廿七}(七九七)

廢_ニ阿波国_ニ伊予_ニ。土左_ニ。新置_ニ土左国_ニ吾橋舟川_ニ一_ニ。日本後紀卷五……桓武天皇) (國史大系本 九頁)

(注) 舟川の舟は丹の旗記であり、丹治川を指すと考えられている。

右の勅の出た翌十六年に駅の廃止と新設がなされるのである。今までの阿波經由が、讃岐の諸駅を経て伊予に入り、大岡(川之江)より南の山背(新宮村馬立)に至り、四国山脈を越えて、土佐の丹治川(立川)に出で、さらに吾橋(吾橋とも。現在の本山)に至り、南下して国府に達すると推定される。なお括弧内の現在の地名はいずれも推定地である。ところが、あと八年たって、さらに次の処置がとられたのである。

延暦廿四年夏四月甲辰。^五(八〇五)

(略) 令下_ニ土左国_ニ帶_ニ一_ニ。加中置_ニ佐馬_ニ五_ニ。以_ニ新開_ニ之路_ニ。山谷_{峻深}一也。(日本後紀卷十二……桓武天皇 同右四一頁)

新道を開き、新駅を置いて、なお土佐への山越えの道は、一〇二七峠の笹ヶ峯越えがあり、山はけわしく谷は深く、旅する人は難渋したので、駅路の通じている郡(ここでは長岡郡)に伝馬五匹を増置したというのである。この道は平安時代後期には、その山道の険阻なため次第にすたれて、海路がこれにとって代ることとなる。その後一七〇〇年代の初めに藩主の参勤交代の道として、復活する。しかし依然として山道のけわしさはつきまどった。笹ヶ峯の北方七〇〇峠ほどの所に笠取峠(約八八〇峠)があり、そこから馬立の^{下付部}落(約三〇〇峠)まで、高さ約六〇〇峠の所を、直線平面距離で約七〇〇^{下付部}_〇で下る急坂がある。概算してじつに四〇度の角度である。この坂道の名を「腹墮丁」という。土佐藩主、山内容堂に「匍匐頂」という七言絶句の作がある。鑿と珊瑚を名産とし、幕末に海援隊長坂本竜馬を出した土佐は海の国としての印象を一般に与えているようであるが、じつは同時に、それ以上に、山の国である。耕地率は、わずかに六・五% (昭和49年現在) である。まことに土佐路はすべて山の中である。

四、遠流の国

都を遠くはなれ、行路險難の地は、流刑の地の宿命を負わねばな

らなかつた。

神龜元年三月庚申 (七二四)^{廿四}

定^三諸流配遠近之程。伊豆。安房。常陸。佐渡。隱岐。土左六
 國為^レ遠。阪方。伊予為^レ中。越前。安芸為^レ近。(續日本紀卷九)

；聖武天皇 國史大系本 一〇〇頁)

右のように流罪の軽重によって、都からの距離により遠中近の三等級が定められ、東國の三國に対して、海を隔てた二つの離島と土佐は同列に並ぶのである。佐渡・隱岐・土佐は後年承久の乱に三上皇が配流されることになる。「延喜式」卷二十九、刑部省の条に次の如き規定がある。

凡流移入者。省定^三配所^二申^レ官。具錄^三犯狀^二下^レ符所在并配所^一。

(略)。其路程者。從^レ京為^レ計。伊豆。去^レ京七百安房。九^レ百常陸。

一^レ千五百七。佐渡。一^レ千三百。隱岐。九^レ百一。土佐等國。一^レ千二百。為^レ遠流。信濃。

五百六。伊予等國。五百六。為^レ中流。越前。三百。安芸等國。四百九。為^レ近流。(國史大系本 七二頁)

令制の一里は公式には五町(一般には六町とすることが広く行われていたという)とされているので、公式によって換算すると、京から土佐までは一七〇里(約五五〇^里)となる。

なお京と諸國間の旅行に要する日数については、「延喜式」主計上に、調・庸の貨物を徒歩で運送した運脚の上京・下國の行程が記

されているので、比較のため四園の他の三園のも、左に載せることとする。

阿波園 行程 上九日。下五日。 海路 十一日

讃岐園 行程 上十二日。下六日。 海路 十二日

伊予園 行程 上十六日。下八日。 海路 十四日

土佐園 行程 上卅五日。下十八日。 海路 廿五日

右の所要日数をみると、阿波・讃岐の約三倍、伊予と比べても、ほぼ倍以上を要している。土佐がいかに都から隔絶していたかを察することができる。

土佐に配流された人は、史料に見えるだけでも、鎌倉時代までに約六十人にのぼっている。文献に見える最初の人物としては、天武天皇五年（六七七）筑紫大宰三位屋垣王の名が「日本書紀」に見える。主な人をあげると、奈良・平安時代に石上乙麻呂・大伴古慈斐・池田親王・氷上志計志磨・弓削浄人・紀夏井・藤原師良、鎌倉時代に土御門上皇・尊良親王等がある。

五、憂愁詩人石上乙麻呂

土佐の名が初めて日本の文学作品に現れるのは、じつに右の流人の中の一人石上乙麻呂の作品においてである。乙麻呂の作品は、和

歌が「万葉集」巻六に長歌三首と反歌一首、漢詩が「懐風藻」に五言四首が見える。いずれも岩波の日本古典文学大系本によって左に掲げる。

万葉集 卷六

石上乙麻呂の土佐園に配えし時の歌三首 反歌を并せたり

1019 石の上 布留の尊は た弱女の 惑に依りて 馬じもの 縄取り付け 鹿猪じもの 弓矢閉みて 大君の 命恐み 天離る 夷辺に退る 古衣 又打の山ゆ 還り来ぬかも

1020 大君の 命恐み さし並ぶ 土佐の園に 出でますや わが背の君を 懸げまくも ゆゆし恐し 住吉の 現人神 船の軸に 傾き給ひ 着き給はむ 島の崎崎 寄り賜はむ 磯の崎崎 荒き波 風に遇はせず 恙無く 病あらず 急げく 還し賜は

ね 本の園辺に

1022 父君に われは愛子ぞ 母刀自に われは愛子ぞ 参上る 八

十氏人の 手向する 恐の坂に 幣奉り われはぞ退る 還き

土佐道を

反歌一首

1023 大崎の神の小浜は狭けども百船人も過ぐといはなくに

石上乙麻呂は、左大臣藤原麻呂の第三子であるが、従四位下左大弁の時、次のような事件を起こす。

続日本紀卷十三、聖武天皇、天平十一年三月庚申、石上朝臣

乙麻呂坐_レ軒_ニ入米連若亮_一。配_ニ流土左國_一。若亮配_ニ下總國_一焉。

(西曆七三九)(國史大系本 一五五頁)

右の和歌は乙麻呂が、土佐の流刑地への旅に立つ時のものである。なお、これらの歌は万葉集では天平十年の部に配列せられているのは疑問とされている。乙麻呂のこの時の年齢については、生年不詳で分からない。天平勝宝二年(七五〇)従三位中納言兼中務卿で死去している。

一〇一九の歌では、土佐を「天離る夷辺」―天の彼方に遠く離れた田舎、と言っている。

当時大和から南海道の土佐への道は、前に述べたように、紀伊を経て阿波に渡るのである。奈良盆地から紀伊への道は、巨勢路から旧宇智郡(五条市)の野に出て紀和国境のまつち山を越え紀ノ川谷に沿うて西行するものであった。まつち山は葛城の連峰のいちばん南の端が、対岸の山地とともに、吉野川(紀ノ川)をこで南北からふさぐ形をなすところで一二一にすぎない山だが、遠くから旅人に望まれ感慨を寄せられる山であった(この項、大森孝著「万葉の旅」上、による)。紀伊も土佐も、この小さな山に集約されて、都落ちした、かの人への愛慕の象徴とされている。なおこの一首は歌意からいって、他の人の作と考えられるが、乙麻呂が他の人の作に擬装し

て作ったという説もある。

一〇二〇・一〇二一の歌の中の「さし並ぶ土佐の國に」(刺並土佐國尔)の「土佐」の二字は底本にないのを大系本は、「古義」によって「土佐」の二字を補っている。いずれにしても、「さし並ぶ國」が土佐の國であることは間違いない。「さし並ぶ」は、紀伊の國と並んでいると解される。そしてこの歌は、「お着きになる島や磯の碑で、荒い波や風にもあわず、病気にもかからず無事で故國にかえして下さい」と住吉の神に祈っている。そこに土佐への遙かな困難な船旅が想像されている。この歌は、一首か二首かについて問題があり、作者についても歌意からは乙磨の妻の作と考えられるが、一〇一九の歌と同じく乙麻呂の作という説もある。今は、その問題には立ち入らないことにする。

一〇二二の歌は、父(七十七)にも母にも最愛の子である自分は、都に上る多くの人々が幣を奉る恐の坂に、私も海路の平安を祈願して幣を捧げて、都とは逆の方角の土佐への道を目指していくことだ、と痛恨の心情を吐露している。なお、「われはぞ退る」(我者叙退)の「退」は「万葉考」によったもので大系本の底本は「追」としていると校異の欄に記している。「参上る」の対句としては「退る」がふさわしいが、海上遙かに遠い土佐の場合は「追」の方が適切である。「土佐日記」の用例をみると、海路の場合、目的地を指

して漕ぎ出すことを「追ふ」と言うのが圧倒的に多い。この歌は、多くの人々は都へ上るのに、自分の行く先は土佐であるというのを、「遠き土佐路を」という結びの句が印象的に表現している。

以上は、これから僻處の土佐へ赴かんとする時の悲嘆と不安の心情を述べたものであるが、土佐の地に着いてからの都を恋ふる望郷の念と孤独憂愁の情とを表現したのは、「懐風藻」の詩である。

なお乙麻呂が土佐へ流されたのは七三九年であるが、本稿四「遠流の國」で見たとように、七二四年には、「諸流配遠近」の制が決まり、土佐は遠流の國とされた。また四国内の道筋としては、七一八年に伊予経由が阿波経由に変わっているので、阿波の國府・郡頭の辺から、恐らく南の海岸回りの線をとって土佐に入り、室戸回りか、野根山街道経由で奈半を経過して、土佐の國府に達したのであろう。

(注)さし並ぶは四國はどの面から見ても二つずつ並んでゐるからともいふ
「懐風藻」には詩の前に乙麻呂の略伝が記されている。それには次の如くある。

石上中納言者。左大臣第三子也。地望清華。人才顯秀。雍容閑雅。甚善風儀。雖島志典墳。亦頗愛篇翰。嘗有朝臨。飄寓南荒。臨洌吟沢。写心文藻。遂有銜悲藻兩卷。今伝於世。(以下略)

名門の貴公子で、優秀な人材で、文学の才の持主であり、土佐の

配所で、その心境を文章に表現したが、「今世に伝はる」と記している銜悲藻二卷は現在に残らず「懐風藻」所収の四首のみが、我々の享受できるものである。右の文中に、土佐のことを、「南荒」と言い、「飄寓」——他郷にさまようといっている。そして流謫地の周辺の洌に向かつては、ため息をつき、沢を眺めてはうめき声をあげ、その憂悶の情を詩文に写した。彼の詩は、いずれも五言八句であり、配所の孤独が全篇ににじんでいるので、四首全部をここに収載して、その心情と表現を見ることが出来る。

五言。飄寓南荒、贈在京故友二一首。

逋竄遊千里。徘徊借寸心。風前蘭送腹。月後桂舒陰。

斜鷹凌雲響。怪柳抱樹吟。相思知別惱。徒弄白雲琴。

この詩の作られた季節は、ここに描かれている題材からいって、秋と考えられるが、何年であろうか。「統日本紀」によれば、乙麻呂は天平十一年三月二十八日に配流となり、翌十二年の大赦には相手の久米若荒は許されているが、乙麻呂はそのことなく、その翌年、十三年九月八日の大赦で赦免となっているから、一年六か月土佐にいたことになる。おそらくこの詩は、流された年の秋から冬にかけての作ではあるまいか。

前記の略伝にも、この詩の題にも「南荒」という語が用いられている。この次の詩には、「南裔」という語が使われている。「南裔」

の方は、多くの辞書に採択しており、用例もいくつか出ていて、「南の果ての地」という意を載せているが、「南荒」は、ほとんどの辞書が採択していない。管見に入つたものでは「大辞典」が載せており、晋書の用例をあげて、「南方のえびす」の意としている。いずれにしても、中国では東西南北の國境には蛮族が住んでいると考へていたので、南裔も南荒も南の果ての蛮族の住んでいる地域の意であらう。この時の場合は、南の果ての荒涼たる地域の印象を受ける。闕・月夜の樹影・斜雁・蟬と特にローカル・カラーはないが、自然の点景は美しく旅愁をそそる。

五言。贈_レ孫公之_レ遷任入_レ京。一首。

余含南裔怨。君詠北征詩。詩興哀_レ秋節_二。傷哉槐樹衰。

彈_レ琴願_レ落景_二。步_レ月誰逢稀。相望天垂別。分後莫_レ長違_二。

前の詩では都の旧友に別れの悲しみを訴えた彼は、この詩では孫公が転任して都に上るを送る。ひとり取り残されて秋風落葉。天垂_二天の果てと彼は土佐を呼んでいる。余含南裔怨、君詠北征詩とは、なんとという哀切痛恨であらう。

五言。贈_レ旧識_二。一首。

万里風塵別。三冬蘭蕙衰。霜花逾_レ入_レ髮。寒氣益_レ羸_レ眉。

夕鴛迷_レ舞袂_二。曉鴈苦_レ雲垂_二。開_レ袷期不_レ識。吞_レ恨獨傷悲。

第一の詩では「遠食千里」といい、第二の詩では「天垂に別る」

といった彼は、ここでは「万里」という。そんな遠くに風塵がお互いを分け隔て、という。なおこの「旧識」、ふるなじみは久米若亮とみる説がある。そして南国土佐でも冬の三か月は寒くて闕や蕙も衰え、霜の花が自分の髪に入つたと、逆境が白髪を増したことを述べる。胸袷を開いて語る友もない。土佐の冬の寒気と孤独と寂寥を歌っている。さて最後の作品をみよう。

五言。秋夜閨情。一首。

他鄉頻夜夢。談與_レ麗人_二同。寢裏欲_レ如_レ実。鶯前恨泣_レ空。

空思向_レ桂影_二。独坐聽_レ松風_二。山川險易路。展_レ軫憶_レ關中_二。

他國の土佐にあって都の麗人を思い夢の中で会って語る空しさを述べている。山川險易路は、都との間に横たわる山や川やけわしい路、平らな道をいい、遙かに山川や長い道に隔てられていることを示す。

この四首には作者の心情の流れが感じられる。第一の詩は、都にある旧友を恋うている。第二は転任して都に帰る知人との別れの寂しさ。第三は冬の寒さと語る友のなきことを都の故旧に訴える。第四は女性を夢に見る赤裸々の情。すべてに共通することは、彼の求めているものは千里の彼方の都である。都の人である。友であり、愛する女性である。彼は政治的権力によって、都との間には物理的な空間が鉄の扉となつて置かれている。そして彼は、土佐を「南

荒」といい、「南喬」と呼び、「遼東千里」、「万里の風塵」と形容し、「天垂」——天の果てという。現代でも土佐は地の果てである。本州から船によらねばならないのは北海道と四国だけである。しかもその四国にあっても土佐の北境は四国山脈の峻険が立ちほだかっている。乙麻呂の時代の旅の苦難を思えば、彼のこうした感じ方もむべなるかなと思われる。

彼は土佐の自然の中から、特に闇や葱の草花、桂や楓樹の喬木などの植物に目を止めている。雁が二回出てくるが、実際に見たとすると珍しい。現代では我々は雁を見た経験は全くない。あるいは往時は見られたかもしれない。そして意外なのは土佐の冬の寒さの厳しいことの描写である。奈良盆地の冬から見れば、はるかに温暖であるはずである。これらには文芸的調色があるかもしれないが、どうもそうとばかりは思えない表現である。第一の詩の「風前蘭送韻、月後桂舒陰、斜鴈凌雲響、怪鴈抱樹吟」の秋の風物から、第三の詩の「三冬闔蘆衰……」の冬の光景との間には、大きな差異を感じる。これは気候の推移によるのか、作者の心情の変化によるか。あるいは両者の相乗作用によるものか。いずれにしても、土佐日記の貫之の書き方とは大分違う。もっとも貫之の場合は、気候が出てくるのは室津滞在中であるので、環境も異なっているが——。年代は貫之は九三五年だから乙麻呂よりも約二百年下ることになる。

さて乙麻呂は、いったい土佐のどこに住んでいたのであろうか。土佐へきた多くの流人の中で、その居た場所が伝わるものは少ない。その中で、紀夏井は香美郡の佐古(野部町)の亀山に住んだと伝えられている。彼は応天門の変に、異母弟豊城が事件に関係していたというので、貞観八年(八六六)肥後守在任中に土佐に流されたが、土佐でなくなつた母のため母代寺を、また亡父の供養のため父養寺を建て、それが現在地名として残っている。その地は、土佐の國府から東南東約五・五キロ高知平野の東北隅にあたる、四国山脈のはしの山すそにある。このほかに菅原道真の長子高視が延喜元年(九〇一)父の事に連坐して土佐介に左遷されてきて、土佐郡潮江(現在高知市)高見の里に住居したと伝えられている。この高見という地名は高視が住んでいたことを示すものだと考えられている。高知城の南方約一キロにあり、浦戸湾の西岸になる。当時は潮江山のふもと近くまで入海であつたと考えられる。なお高視は延喜三年道真が死んだ後、赦免され、同六年には京に帰つたと考えられる。

乙麻呂の詩句の中からも、居所を想像させるような材料は見当たらない。ただ、これは作者の心情からくるものであろうが、全体から受ける感じは、土佐の中央地域である國府を中心とする高知平野一帯の地相、気候からいえば、「暗い」という印象を受ける、ということをおのこは付記しておくにとどめる。(一九七六・一〇・三一)